

■（２５）言葉にならない惨状の思いを文字にする

巨大地震の直後、東京から、大阪から、福岡から、約１００人の仲間が、空路や陸路で東北の被災地を目指した。電車も道路も各地で寸断されているので徒歩。壊れた建物のがれきを乗り越える… 発生直後に被災地に入った記者たちは、たどり着いた先の想像を絶する惨状を渾身の思いを込めてルポした。そして再び次の被災地を目指した。

読者に発した記事の思いが、自分らにも返ってくるようだ。津波で壊滅状態となった町からの同僚の記事。町長が記者の腕章を見て近づいてきた。「惨状を町外の人に知らせて欲しい」。救援を待つ人の存在を新聞で外の人に伝えて欲しいという涙ながらの訴えだった。このような話はここだけではない。「記事に出ている被災者は私の知り合いかも」という問い合わせ電話も新聞社に来る。被災した人と心配している人を紙面の上でつなげられないか。そんな思いから、避難所の人々の顔写真と名前を数多く紹介する企画を始めている。

行方不明となった両親やいとこの名を書いた紙を手には避難所を捜し回っている小学３年の男児を紹介する記事があった。男児は震災発生から７日目、いともこと再会できた。（山）